

# 『かたこと』をよむ(その四)

白 木 進

本稿は先に発表した「かたこと」をよむ(甲、乙)に続くものである。  
今回は左について述べる。

一回は左について述べる。

一、「かたこと」の仮名遣についての気付き一、二

二、「かたこと」における合拗音表記

(付)、「浮世鏡<sup>第二</sup>」における合拗音表記

三、日本語の合拗音(略)史

四、「かたこと」における音便について

なお「かたこと」及び「浮世鏡<sup>第三</sup>」の引用文に付したアラビ

ア数字は、笠間選書52「かたこと」、及び同12「かたこと」考

の第一付録、頭注浮世鏡<sup>第三</sup>に利用した項目番号である。

一、「かたこと」の仮名遣についての気付き一、二

「かたこと」の文は、「みなた。言葉もて記し侍る」(序文)とは言っても、勿論歴史的仮名遣で貫かれ、さすがに著者は文筆の雄だけあって、誤記はごく少ないが、気付きの一、二をあげてみる。

「かたこと」をよむ(その四)

1、四つの仮名の混用

先掲「かたこと」(笠間選書52)の189—190ページに述べた通り、

(1)じ↓(ぢ) 8例

(2)ぢ↓(じ) 17例

(3)ず↓(づ) 0例

(4)づ↓(ず) 2例

である。

2、「い・ひは同じければなり」(282条)の論

ワ行音のキ・エ・ヲがイ・エ・オへ変移したのと、ハ行音が二音節以下でワ・イ・ウ・エ・オとなる(ハ行転呼音)ため、ア行・ハ行・ワ行間の混用がおこり、室町—徳川期には文筆の徒も常用することとなるが、この混用は「かたこと」にも「浮世鏡<sup>第三</sup>」にも見られる。

「かたこと」67条に「仮名遣ひの書にいろいろとあり」の文あり、仮名遣ひの書とは「仮名文字遣」を指すと思われる。然し著者は必ずしも定家仮名遣を墨守するものでもない。自ら「い・ひは同じければなり」(282)という如く、

わーは  
るーひーい  
ふーう  
ゑーへーえ  
をーほーお

を奔放に駆使混用して憚らない。例えば

わーは 248 因果 みんぐわ  
みんぐは

いーるーひ 5 田舎 いなが  
みけん 異見 11 強て

うーふ 7 とうかんふ

えーゑーへ 13 さえづる さへづる 15 家 いゑ

おーを 5 御見舞 みけん 11 おこがまし

の如し。字音仮名遣に於ても

雑 ざつ  
12 290  
643

十 じゅう  
13

はそれぞれ ざふ じふ と書くべきであろうが、之も「う・ふは同じ」とする観点から出た誤りで、著者は当然として気になかなかつたのであろう。

## 二、『かたこと』における合拗音表記

『かたこと』に出る合拗音表記を表にしてみる。

△印は、著者がかたこと・正しくない訛音 としてあげるもの。

180	177	176	170	166	148	111	109	97	87	83	々	82	73	66	65	46	15	条
										ざぐわ				官僧	官爵 くわんしやく	傀偏 くわいへん	懷紙 くわいし	と表記するもの
																		「くは」「ぐは」と表記するもの
																		「か」と表記するもの
存外																		↑ 家督 かとく
																		↑ 合掌 がっしやう

577 513 479 439 426 384 333 313 291 290 281 270 266 265 // // 248 193 192

「かたこと」をよむ(その四)

水瓜 <small>すいぐわ</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	活計 <small>くわつけい</small>	奇怪 <small>きくわい</small>	果報者 <small>くわはうしや</small>	果報 <small>くわはう</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	くはほう者 <small>くはほうしや</small>	元日 <small>げんじつ</small>	元三 <small>げんさん</small>	ひんぐはん	にんぐはち <small>しんぐはち</small>	喧嘩 <small>けんわ</small>	御還御 <small>ごはんぎよ</small>	御還御 <small>ごはんぎよ</small>	繖 <small>くハシクハ</small>	繖 <small>くハシクハ</small>	布袋和尚 <small>ぶたいわうしやう</small>	錐子 <small>くはんす</small>	まんぐはん	まんぐはん	ほんぐはんちやう	霍乱 <small>くわらん</small>	菓子 <small>くはし</small>	菓子 <small>くはし</small>
		くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ	くはつつけ
										彼岸 <small>ひがん</small>										奉賀帳 <small>ほうがちやう</small>				

800	777	770	725	724	634	//	629	615	607
計9(うち訛言1)									
計62(うち訛言15)									
富貴栄花 <small>ふうきえいげ</small>	百貫 <small>ひゃくくわん</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	くはつたり	くはつたり	巨過 <small>たんとは</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>
富貴栄花 <small>ふうきえいげ</small>	百貫 <small>ひゃくくわん</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	くはつたり	くはつたり	巨過 <small>たんとは</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>
富貴栄花 <small>ふうきえいげ</small>	百貫 <small>ひゃくくわん</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	因果 <small>いんぐわ</small>	くはつたり	くはつたり	巨過 <small>たんとは</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>	関 <small>くわん</small>

合拗音は本来漢字音から将来されたものであるが、右表の中の724くはつたり 725くわつたり の二語は和語で擬音語である。この種の語は抄物や狂言記に見られるが、また、徳川期の俗文学の中にも、くはつと くはらく くはたく くはんく などがある。

著者の文章には先述の わーは いーひーる の類は混用するが、(△印の、訛音としてあげた109、176、270、439は別として)合拗音表記に誤りは認められない。(付)の浮世鏡第三の場合も同じ。

備考  
(1)花車の語が9条66条に出る。伊京集に「花奢 キャシヤ 倭

39	29	28	18	1	条
篇目					
せんぐわんじ					
せんぐわんじ			せんぐわんじ		
恵光寺	誓願寺	寂光寺	仏光寺	関白	関白
官職等之部					
くわ(ぐわ)と表記するもの					
詠音表記					
			ぶんかう寺		
			じゃこじ		

語或作「花車」。又云「香茶也。」と言ひ、諸橋の大漢和辞典にも用例が見えるから或いは漢語であろうか。漢語からきた語とすれば「くわしや」の音転か。大言海にいう、「花車 キヤシヤ、華奢の転かとも云ふ。」

(ロ)11条に参会(クワイ)。48条にぬかり……忽滑(クワツ)と書るとかやと合拗音の漢字が出るが、ふりがなは無し。

(ハ)482 黄疸を。きわうだん

下の訛語(かたこと)をきわう・だんと見れば、上部が合拗音とも言える。然し後の「世話類聚」(「かたこと」の亜流書)でこの条を重言として取上げているから、き・わう・だんと見るべきである。類似語に「浮世鏡」の197条これれん胡黄連 こ・はう・れん がある。

(付)「浮世鏡」における合拗音表記

△印は かたこと・訛音としてあげるもの。

308	306	224	212	194	191	181	180	118	70	68	61	60	51	42	40
くわんだい大し															
大 黄 だいわう															
関白殿															
くはんじやうじ殿 勸修寺															
殿 クハジャウジ															
衣冠															
めうり 観音 如意輪 観音															
観音もくはんのんと唱るがよし															
元三大師															
和尚 慈鎮和尚															
左完															
無始 広劫															
くはしん 菓子 くはし															
くはつろうこん 活萋根															
くはつろうこん															
げんくは 玄関 げんくはん															
しよんぐはつ 正月															
やつくはん 葉錐 やくはん															
傀儡子															
かんばん殿															
むしこうぐ															
やかん															

### 三、日本語の合拗音(略)史

#### 1、漢字の渡来と漢字音の導入

泉貨(新の王莽がAD16〜22年に鑄造)や金印(後漢の光武帝がAD57年に倭国使者に授与)などが発掘されており、漢字の渡来の古いことが分かるが、さてその漢字音はどのようにして受入れられたのであろうか。

漢字は一字一義(即ち一語)一アクセントの単音節文字、中国語(孤立語)を写すのを使命として生長した表意的文字である。形は絵画的象形より出発して、甲骨文:篆文:隸書:から楷・行・草(六朝一唐)と変化した所で、印刷技術が漸く広まり、よって字形の変移は止む。印刷以前の書写では、常に「簡と速」が要求され、字形は簡化の道を辿ったのだが、表意的文字たる性格上、文化向上に伴う字(一語)数増加は必然であり、また書道としての美的追求から、同一文字の複数化、書体繁化(線で構成する文字に面的要素が加わり、意識して形を大小、長短に書き分けるなど)となる例もあった。

← 後漢ノ許慎 説文解字 九、三三三

← 北宋ノ鄭樵 六書略 二四、二三五

← 清ノ康熙帝 康熙字典 四八、六四一字

字形はある程度定着する性質があるに反して、字音の方は絶えず動揺するので実態を捉え難いが、概説すれば、宋の広韻(1002年)で206韻、今日の北京音で41、更に四声(北京で四声、南方の広東で八声、福建で九声)の別がある。之に対し受入れ側の日本語(附着

「かたこと」をよむ(その四)

語)は本来音節数が少なく、奈良朝期(中国文化輸入最盛期)では88音節に過ぎぬ。数多い中国漢字音を、数少ない日本語音節で導入消化するには、困難と苦勞が多かったに違いない。大矢透氏いう、我が国の字音には、音図の開合なるに拘らず、唯、聞き取れるところによりて、合音に近く聞ゆれば、其のまゝ合音のワ行の仮名にて写せるものなることを覚るべきなり。(韻鏡考76p)

右は合拗音取入れの場合に触れて述べたものだが、聞くがまゝに写しとつたのは、総べての字音に亘つて言えることであらう。

中国字音の受入れに当り、中・日の間で音韻が有無相通するものは問題はないが、彼に在って我に無いものについてはどう扱つか。

(1)棄てて採らぬ 四声などが之に当る。

四声は「記」などに取入れようとした形跡はあるが、実用に値しなかった。但し後世、アクセント表示に平上の語や符号が使われ、漢詩作成には、音声でなく規則として使用した。

(2)近い音に充てる。H音(奈良・平安朝の日本語にはない。)はF音に、有気のH音は同じ喉音のKやGに。(漢↓カン 海↓

カイ 学↓ガク)

(3)新音として取入れる。開・合の拗音、捲音、促音など。

(2)、新村出氏の「音韻史上より見たる「カ」「ク」の混同」(東方言語史双考所収)について

新村氏の論を要約すると、「クッ」という「ワ」行拗音又は唇部拗音の類(韻鏡では外転24)は、

カ行については「クキ」「クヰ」「クヱ」「クヰ」「クヱ」

他行では「スッ」「ツッ」「ヌッ」「ルッ」等があり、

更に「スキ」「ツキ」「スキ」「ルキ」がある。中国語の合拗音を、安南や朝鮮では或る程度伝えたと拘らず、日本では「カ」行音以外の「スワ」「ツワ」「ヌワ」「ルワ」等の合音を初から棄てた。「スキ」「ツキ」の如きも日本では純粹の唇的拗音として *swi, tswi* 等とは発音せずに、緩かに二重音にした。後世の仮名遣法では「スキ」「ツキ」と書くが、其等の文字が合音であるから「ワ」行の文字を書くべき筈だといふ理窟から来たので、我国古書の仮名遣には「スイ」「ツイ」の方が普通である。(48頁)

カ行の合拗音「クワ」「クヱ」「クヰ」については、

○「クヨ」(呼<sup>フ</sup>乎<sup>フ</sup>越<sup>ク</sup>越<sup>ク</sup>国<sup>ク</sup>…) 初から「クヨ」「クヨ」を混一して「クヨ」にした。

○「クエ」(變化<sup>へんくわ</sup> 源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>) 仏書・儒書の古い訓点など区別は嚴重に行はれた様であるが、…常人の口語としては平安朝の中世頃に混一したのではあるまいか。

○「クキ」(貴<sup>き</sup>婦<sup>ふ</sup> 鬼<sup>き</sup>…) 前条と同じく古くは言分けたが、段々「キ」に變じた。變化の時代は「クエ」が「ケ」になった時代よりも一層古らしい。(47頁)

○「クッ」は唇的拗音の残響として徳川期まで余命を保つが、「クッ」「カ」の混一はいよいよ進み、それも東国に比すれば、上方は確かに一歩後れて、混同したのである。(47頁)

(3) 徳川期にみる直音化の実態の一、二

徳川期も初期の「かたこと」や「浮世鏡<sup>第三</sup>」では、「いーひーる」の類の混用はあるが、著者が正言とする語の合拗音表記に誤はないと先に述べた。(181頁) 尤もこれは規範的意識の下で書かれたせいもあろうし、実際の発音面では直音化していた例のあることは左の通りで、之を著者は訛言(かたこと)として戒めている。

「かたこと」で 170流<sup>うら</sup>灌<sup>かん</sup>頂<sup>てい</sup>を。ながれかんぢよ  
「浮世鏡<sup>第三</sup>」で 18ぶんかう寺<sup>い</sup> 仏光<sup>ぶつ</sup>寺<sup>じ</sup>也

等は一般に<sup>く</sup>かんと直音化していたのを注意したのである。謡曲の発音に注意した「音曲玉濁集」(江戸一七二七年刊)に、

「くわ」の字、「か」に紛れぬやうにいふべき事を戒めているが、それかあらぬか、

江戸音にクワの音無し。…これ江戸の人も謡などよくうたふ人には決して無し。(氏家剛大夫一荘内方言攷)

クワ、グワの直音化は一般的には東部江戸が早く、上方が遅れると言われ、浮世風呂で京女の

へ、関東<sup>くわんとん</sup>べいが、…観音<sup>くわんおん</sup>さまも、かんのんさま、なんのこつちやるな。

などが例にあがる。松村明氏は「江戸語東京語の研究」で、いま、「浮世風呂」に出てくる会話のこぼれについて見ると、これらの点(出<sup>で</sup>エー クワ↓カ シューシ ヒ↓シなどの訛り)が、すべての人の会話に一樣に見られるわけではない。たとえば三編巻の下に出てくる「…物しづかに人がらよき婦人二人」の会話などでは、こういう特色がほとんど見られない。

くわんし  
冠辭をふたつ立入て。至極面白ううけ給はります。(43ペ)

の如し。また浮世風呂、浮世床では、

(イ) クワ グワを保っている者

(ロ) カ ガ とする者

を意識的に区別して描き出そうとしている点を認め、

(ハ)は物知りぶる男 素説指南の先生 医者 隠居 屋敷勤めをし

たことのある女中……

(ニ)は勇み肌の職人 伝法肌の遊び人 長屋のかみさん 町芸者

子守下女……

であるとしている。

(4)、クワ グワの合拗音として、字音仮名遣書に指示された文字の例

クワ 火 戈 瓜 寡 化 花 貨 訛 靴 禾 和 科 菓 菓

課 夥 頤 窠 華 嘩 譁 禍 蝸 過 夸 誇

クワイ 快 怪 潰 乖 穢 回 廻 徊 恢 恢 談 悔 晦

誨 会 桧 繪 脛 絵 繪 傀 塊 魁 鬼 壞 懷

グワイ 外

クワク 畫 劃 括 郭 廓 獲 獲 攫 攫 鬻 鬻

クワツ 豁 活 刮 括 闊 滑 猾

クワン 寬 桓 冠 卷 患 盪 款 関 緩 鰥 完 莞 貫

「かたこと」をよむ(その四)

價 官 宦 菅 管 棺 館 喚 換 煥 環 還 寰 灌

鐘 勳 飲 觀 權

グワン 願 丸 納 元 玩 頑

クワウ 光 恍 黄 廣 曠 曠 斂 荒 慌 宏 紘 皇 惶

徨 邊 篋

グワウ 轟

「クワ」「グワ」とその長音「クワウ」「グワウ」を比較すると、

上方でも後者がより早く直音化したようである。即ち

○先掲の「浮世鏡第三」に出る「光」・「広」は、訛音(かたこと)の場合、みな「こう」(18) こ(28) こう(180)となつてい

る。

○謡曲英華集(上方、1764年写本)は「クワ」「グワ」の直音化には

触れていず、然し長音の直音化は、「光」黄、廣の類、カウ

コウに紛れざるやうに「注意」している。

(5)、明治期における「クワ」「カ」の統一

(イ) 明治33、8、21、文部省は小学校令施行規則を改正し、中で

字音仮名遣の改訂……「クワ」ヲ「カ」ト書ク。(第2号表)

但し「従来慣用ノ例ニ依ルモ妨ナシ」

(ロ) 明治35年、国語調査委員会設立され、全国的に音韻調査を実施、その結果を38年に「音韻調査報告書」及び「音韻分布図」として

発表した。「クワ」「グワ」に関する要点は左の如し。

「クワ」「グワ」に関する調査は第22項23項に在り、

第22項 字音ノ Kwā Kwā (クワ、グワ)ト、Ka Ga (カ、ガ)ト

ノ区別アルカ。

「火事」「喧嘩」「銀貨」「会」「観音」ナドノ「火」「嘩」「貨」  
「会」「観」ヲ「クワ」「クワイ」「クワン」ト、拗音ニ発し、「絵  
画」「外国」「本願」「正月」ナドノ「画」「外」「願」「月」ヲ「グ  
ワ」「グワイ」「グワン」「グワツ」ト拗音ニ発音スルカ。

の問に対し、報告書で、区別あり(○印)とする府県、一部あるいは半ばが区別する(△印)府県とを、○・△別に示すと、

- △北海道 ○青森 △岩手 △山形 △岐阜
- △福井 ○石川 ○富山 △山梨 △愛知
- △京都 ○大阪 ○奈良 △和歌山 △鳥取
- 徳島 ○愛媛 △高知 △佐賀 ○長崎
- 大分 ○熊本 ○宮崎 ○鹿児島 ○沖縄

となり、全府県下で区別あるもの13、一部で区別するもの13道府県である。

### 第23項(省略)

音韻分布図(補助委員新村出、調査事務嘱託亀田次郎作成)で

「カ」「クワ」「ガ」「グワ」の分布は第27図に出ている。中に日

音韻分布図ニ就キテ注意スベキ点

子音ニ関スル部

二、「カ」「クワ」ノ区別大体ニ於テ畿ナレドモ猶ホ一定ノ少数ナル語ニ於テ「クワ」ノ「カ」ニ転ジ、又ハ「カ」ノ却テ「クワ」ニ転ジタル地方アリ、本図ニ於テカ、ル場合ヲモ示シタリ。  
「カ」「クワ」ノ区別ハ西南部及ビ北方沿海ノ一帯ニ行ハレ、其

範圍ハ狭シトセザレドモ、猶區別ヲ失ヒタル範圍ニ比シテ小ナリトス。

之らの調査を主とし、「カ」「クワ」の発音及び仮名遣の問題に關する審議が、37年三、四月の交にあり、其の結果は、38年末、文部省図書課より公表され、(新旧仮名遣对照表第一号)「カ」「クワ」の混一は承認され、しかも但書の許容も無くなった。

(6) 昭和敗戦後における「クワ」「カ」の統一  
昭和21、11、16、に内閣告示の「現代かなづかい」では、細則1、33に亘り、現代音にもとづくかなの書き方を示す。その第2にいう、  
くわ、ぐわは か、がと書く。

として例を示し、更に細則の末尾、注意1に  
「クワ・カ」「グワ・ガ」……をいい分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。  
としており、地域による許容は復活した。

22、6、に出た「国語音声学綱要」(神保格著「明治図書」)の141  
ぺに、  
クワ グワ グワ

かやうな音節は今日東京語其他では全く使はない。  
とあるが、然し方言では、明治の調査表(186頁上段)に見るほど多くはなくとも、今も未だかなり残存している。

(付) 外来語にみる新しいクワ行拗音



近来、俗間で耳にする外来語の中に、リクエスト (request)、クォーテーション (quotation)、クイック (quick) などあり、漢語・和語における合拗音は直音化したのが、新しい外来語からクッ行拗音が再来している面もある。

#### 四、『かたこと』における音便について

音便 (言便) が考察されるのは、徳川期中期以後のことに属し、まだ『かたこと』の著者の関心の及ぶ所ではなかった。然し『かたこと』が言葉、特に音声の面を取りあげた書なので、書中に現れた該当事項を抽出して分類を試み、音便に対する著者の扱い方をみる。

音便には (1) い、(2) う、(3) つ (促)、(4) ん (撥) の四種がある。よってこの四種別に、『かたこと』における音便例を列挙し、考察する。

##### (1) い音便

『かたこと』には、い音便らしきものは殆ど見あたらず、僅かに次の慣用語三例がある。

- (イ) さいつ頃 (9)
- (ロ) 朔<sup>つたち</sup> (272, 282)
- (ハ) すいばら (638)

(イ)は「先つ頃」の変化で、既に宇津保、源氏、大鏡などの古典で「さいつころ」と慣用された語

(ロ)は「月立ち」の音便だが、著者はそうは見ず、「月日立つとい

『かたこと』をよむ (その四)

ふころ成べし。い。ひは同じければ也。き文字は略敷。」(228)と解す。

(ハ)すいばらは播磨の国杉原村で紙の産地、紙の代名詞となる。下学集に「杉原スイバラ」とあり、海人藻芥に女房詞として「相原ヲバスイバ」と言い、紙を指す慣用語。

「付て」は「つきて」と読み、い音便には読まぬ。

『かたこと』の文中には、付て (15, 248, 667)、置て (35)、書て (343, 350, 643) などの用例は多いが、時に「付て」(14, 32) 置たる (13, 794) 書<sup>かきつけ</sup>付て<sup>おき</sup>置て (152) と仮名づけしてあるので、いずれもツキテ オキテ カキテと読ませたのであろう。

##### (2) う音便

他の音便が少ないのに比べて、う音便はかなり多い。中には「う・ふは同じ」とみる観点から、「ふ」となっているものもある。左に列挙する。

- |                 |            |              |
|-----------------|------------|--------------|
| 如在なう (2)        | はやうより (4)  | とうかんなふ (7)   |
| 等閑なふ (7)        | なをさりなふ (7) | かう (9)       |
| 浅ましう (9)        | かうやう (10)  | 浅ましう (13)    |
| きらくしう (13)      | あいなう (13)  | 程なふ (13)     |
| やすう (13)        | 久しう (21)   | 冷じう (21)     |
| かどくしう (21)      | 冷じう (29)   | 聞きよう (33)    |
| いやしう (60)       | かうやう (65)  | 下女しう (68)    |
| すまう (174)       | さもしう (290) | りうこうしや (379) |
| かう (髪) づか (472) |            | 泥亀 (550)     |
| かうもり (564)      | さもしう (641) | 浅ましう (643)   |

すさまじ

冷じう (643)

すごう (643)

いたう (643)

よろしう (649)

あしう (649)

おかしう (653)

やさしう (660)

よろしう (680)

強う (685)

さびしう (718)

いやしう (740)

やさしう (740)

いみじう (799)

はやう (800)

わかうど (800)

そこはかとなふ (800)

しろう (800)

黒う (800)

おもしろう (800)

からうして (800)

(3)つ(促)音便(促音訛のかたこと語は除く。)

しかあつしなら (34) 富貴ふつき(248) 悪口あつこう(290) としはよ

つたり しははよつたり (244) 北絹ほくけん(357) 蠟足ろうそく・らつそく

(393) 法中ほふちゆう(405) 薬器やくき(414) そつくひ(452) 日腫にっしゆ(477)

備考 406条に「立て」がある。例により活用語尾が省略されて

いるが、読み方は促音便の「立ツテ」ではなく、「立チテ」で

あろう。

(4)ん(撥)音便(撥音訛のかたこと語は除く。)

かんな(5) 329 383 387 417 509 789) 仮名かみな(71 72 541 799) の語が多出す

る。

カリナの撥音(n)便であろうが、著者は、

仮名かみなといふことを。書しよにむかひてはかんなとよむべしと云り。

(72)

と言ひ、名目とみる。

就中なんづく(33) も撥音便であろうが、副詞に定着した慣用語であ

る。

(なお、古くは存在した「摘むー摘んだる」のようなm音便に該当

する例は見当らぬ。)

(付) 「かたこと」における促音表記の省略

古典で促音や撥音の表記を省略(ゼロ表記)した例は多い。今

「かたこと」において、促音表記を省略したと見られる例は左の

如し。

もたり(序) 以外もとのほか(1) 誤をもて(4) よてよて(9、12)

剩あまへ(15) あさて(22) よて(44、239、550) 由是よてこれに(637)

よて(637)